鶴見岳・伽藍岳の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山性地震は少ない状態で経過しましたが、長期的にはＢ型地震[1)]が時々発生しています。その他の火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

鶴見岳・伽藍岳の想定火口域内では、噴気、火山ガス等の噴出がみられますので、注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図２-①③④）

石垣監視カメラ（大分県設置）による観測では、鶴見岳では前月に引き続き噴気は確認されませんでした。

塚原無田監視カメラによる観測では、伽藍岳では噴気が最高で噴気孔上 300m（９月：300m）まで上がりました。

・地震や微動の発生状況（図２-②⑤～⑦、図３）

火山性地震の月回数は 22 回（９月：４回）と少ない状態で経過しましたが、24 日から 29 日にかけて伽藍岳付近を震源とする地震が一時的にやや増加しました。Ｂ型地震は観測されませんでした。

震源が求まった火山性地震は、鶴見岳山頂の東約１km の深さ５km 付近、鶴見岳山頂の北西約１km の深さ３km 付近、及び伽藍岳山頂の南西約１～２km の深さ１km 付近に分布しました。

火山性微動は 2010 年 11 月の観測開始以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図４、図５）

GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められません。

1）一般的に、火山性地震のうち、相が不明瞭で、比較的周期が長いものをＢ型地震と呼んでいます。火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び大分県のデータも利用して作成しています。
資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図 1-1　鶴見岳・伽藍岳　噴気の状況（10 月 31 日、石垣監視カメラ（大分県設置））
鶴見岳では、噴気は前月に引き続き確認されませんでした。



図 1-2　鶴見岳・伽藍岳　噴気の状況（10 月 3 日、塚原無田監視カメラ）
伽藍岳では、噴気が最高で噴気孔上300m（９月：300m）まで上がりました。

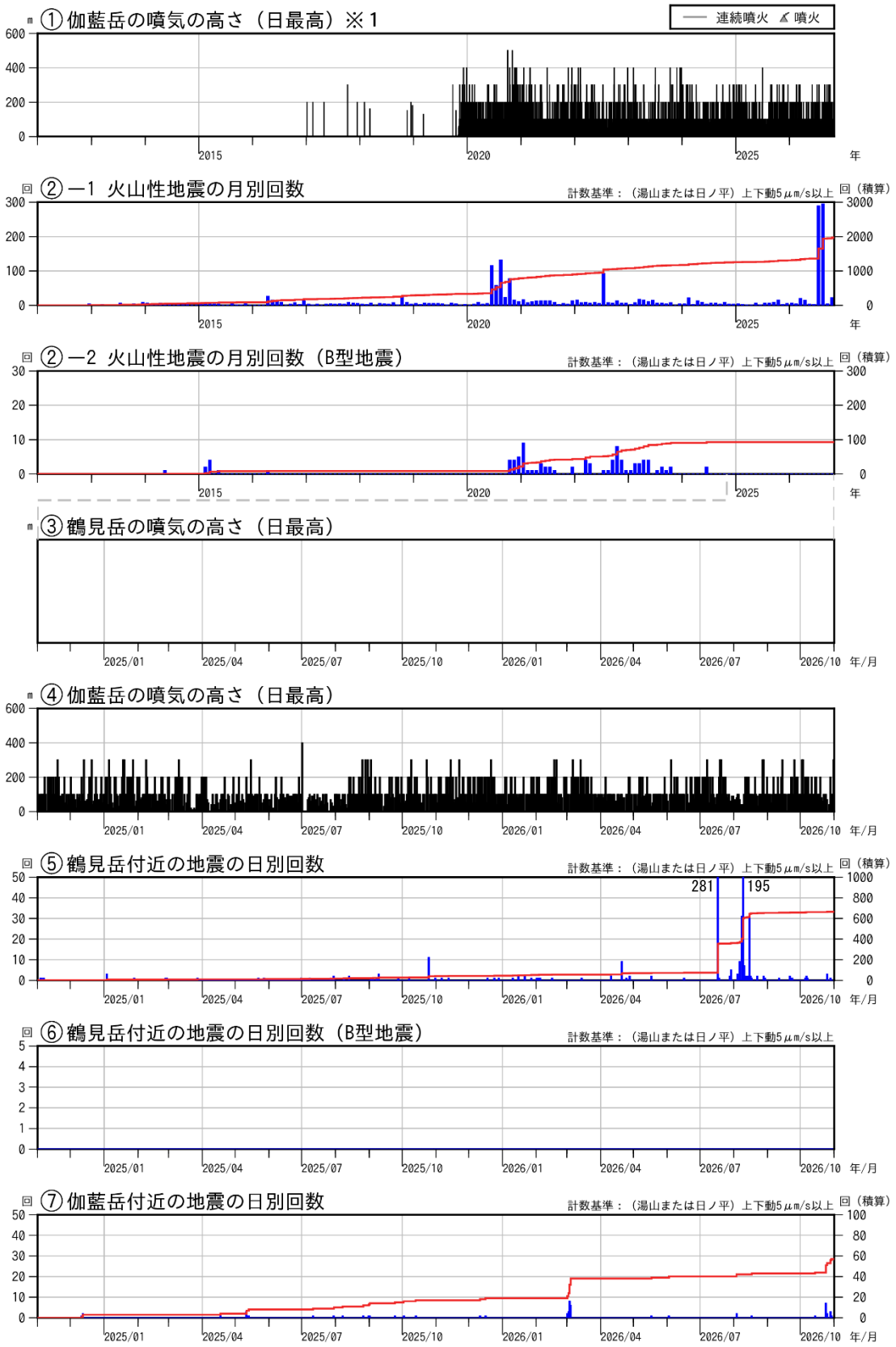


図２　鶴見岳・伽藍岳　火山活動経過図（2012 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

・鶴見岳では、噴気は前月に引き続き確認されませんでした。
・伽藍岳では、噴気が最高で噴気孔上 300m（９月：300m）まで上がりました。
・火山性地震の月回数は 22 回（９月：４回）と少ない状態で経過しましたが、24 日から 29 日にかけて伽藍岳付近を震源とする地震が一時的にやや増加しました。Ｂ型地震は観測されませんでした（９月：０回）。

※１　伽藍岳の噴気の高さは 2019 年 11 月より塚原無田監視カメラにより計測しています。
赤線は火山性地震の回数の積算（右軸）を示します。

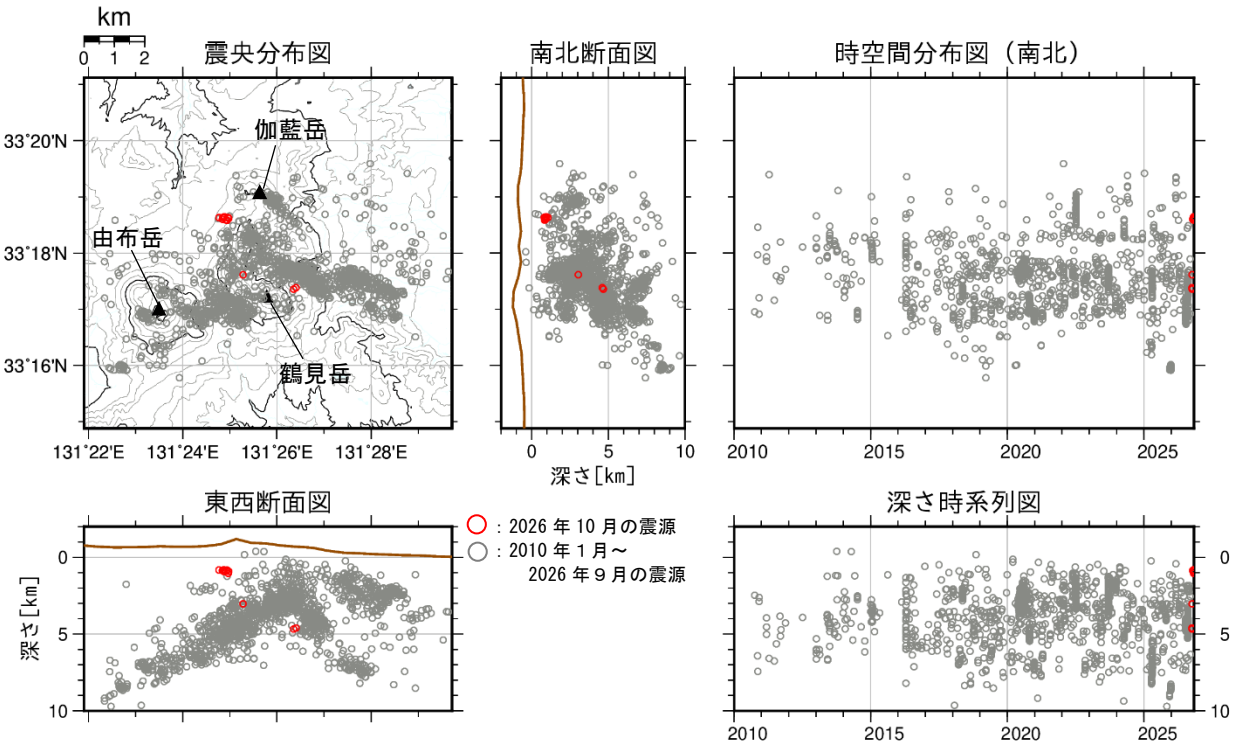


図３　鶴見岳・伽藍岳　震源分布図（2010 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

震源が求まった火山性地震は、鶴見岳山頂の東約１km の深さ５km 付近、鶴見岳山頂の北西約１km の深さ３km 付近、及び伽藍岳山頂の南西約１～２km の深さ１km 付近に分布しました。

山体周辺及び山体下の深さ 10km までの地震を表示しています。
近傍の観測点（湯山、日ノ平、内山北尾根、鶴見岳西山麓）において、Ｐ波とＳ波の到達時間差が概ね１秒以内の地震を掲載しています。その中で、鶴見岳・伽藍岳付近の地震を火山性地震としています。
2017 年３月 24 日の鶴見岳西山麓観測点の整備により震源決定の精度が向上しています。

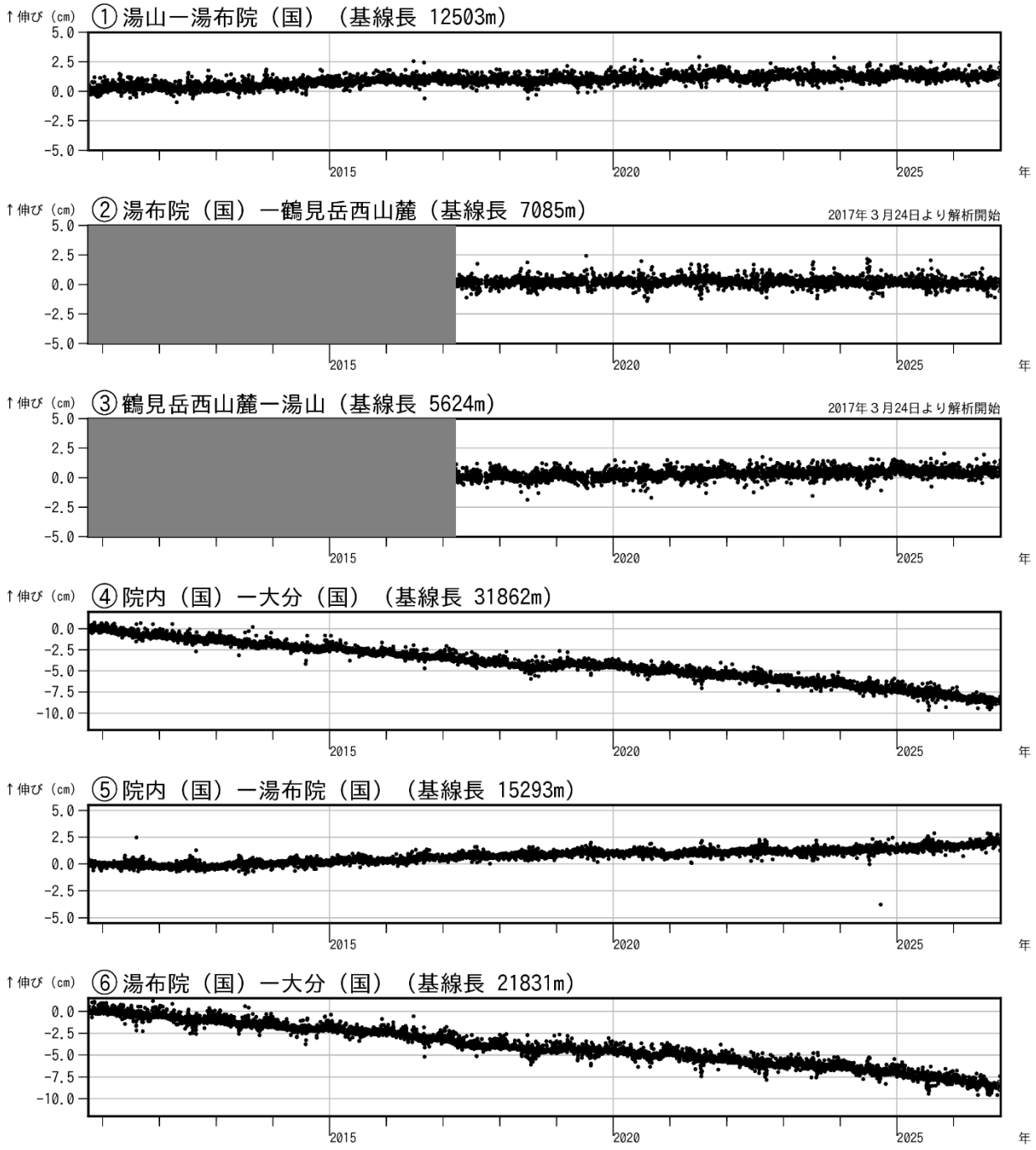


図４　鶴見岳・伽藍岳　GNSS連続観測による基線長変化（2010 年 10 月～2026 年 10 月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められません。

この基線は図５の①～⑥に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
2016 年４月 16 日以降の基線長は、平成 28 年（2016 年）熊本地震の影響による変動が大きかったためこの地震に伴うステップを補正しています。
2018 年頃から 2019 年頃にかけて、日向灘北部及び豊後水道周辺のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定される地殻変動がみられます（基線④、⑥）。
（国）：国土地理院

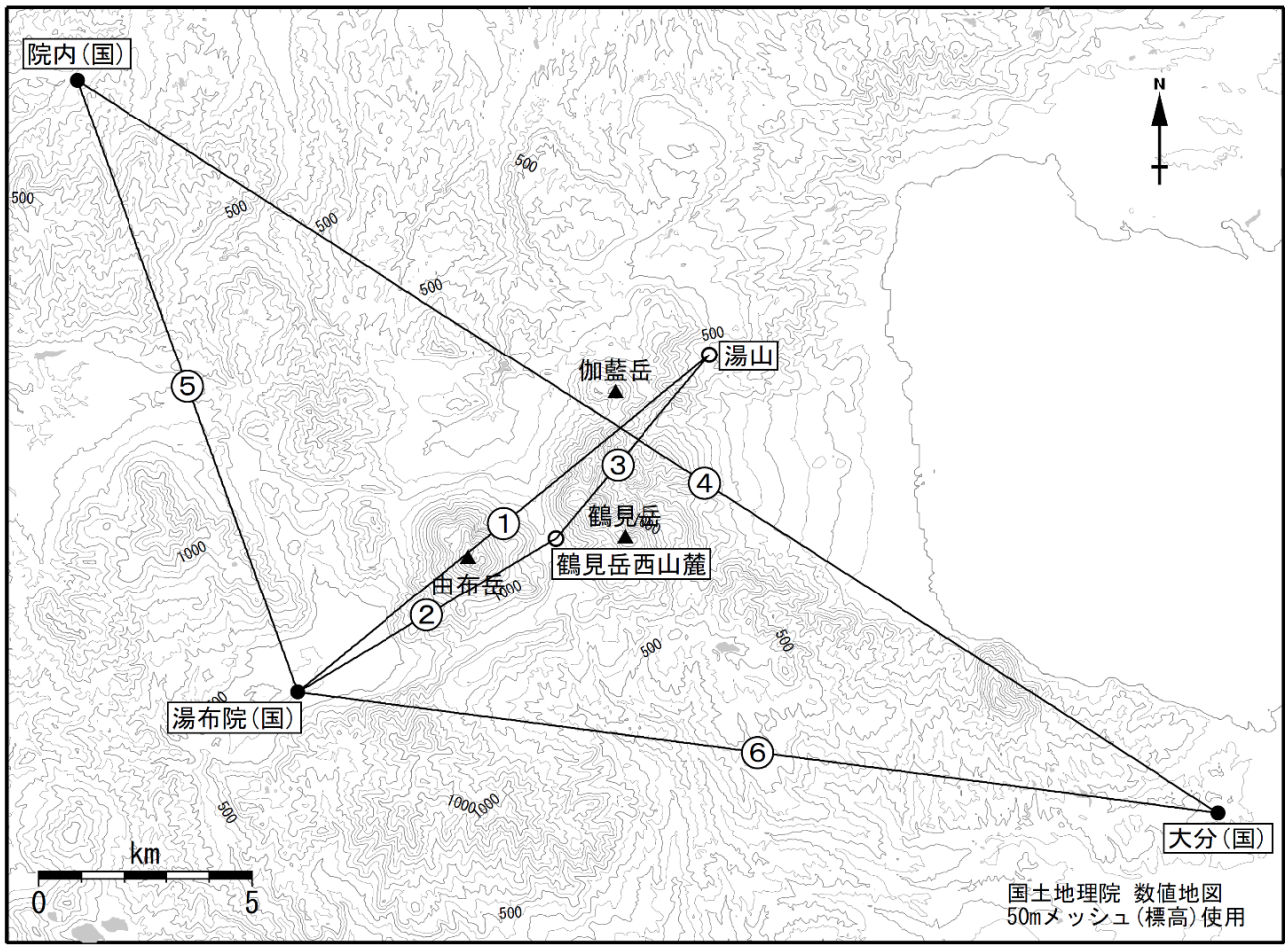


図５　鶴見岳・伽藍岳　GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院

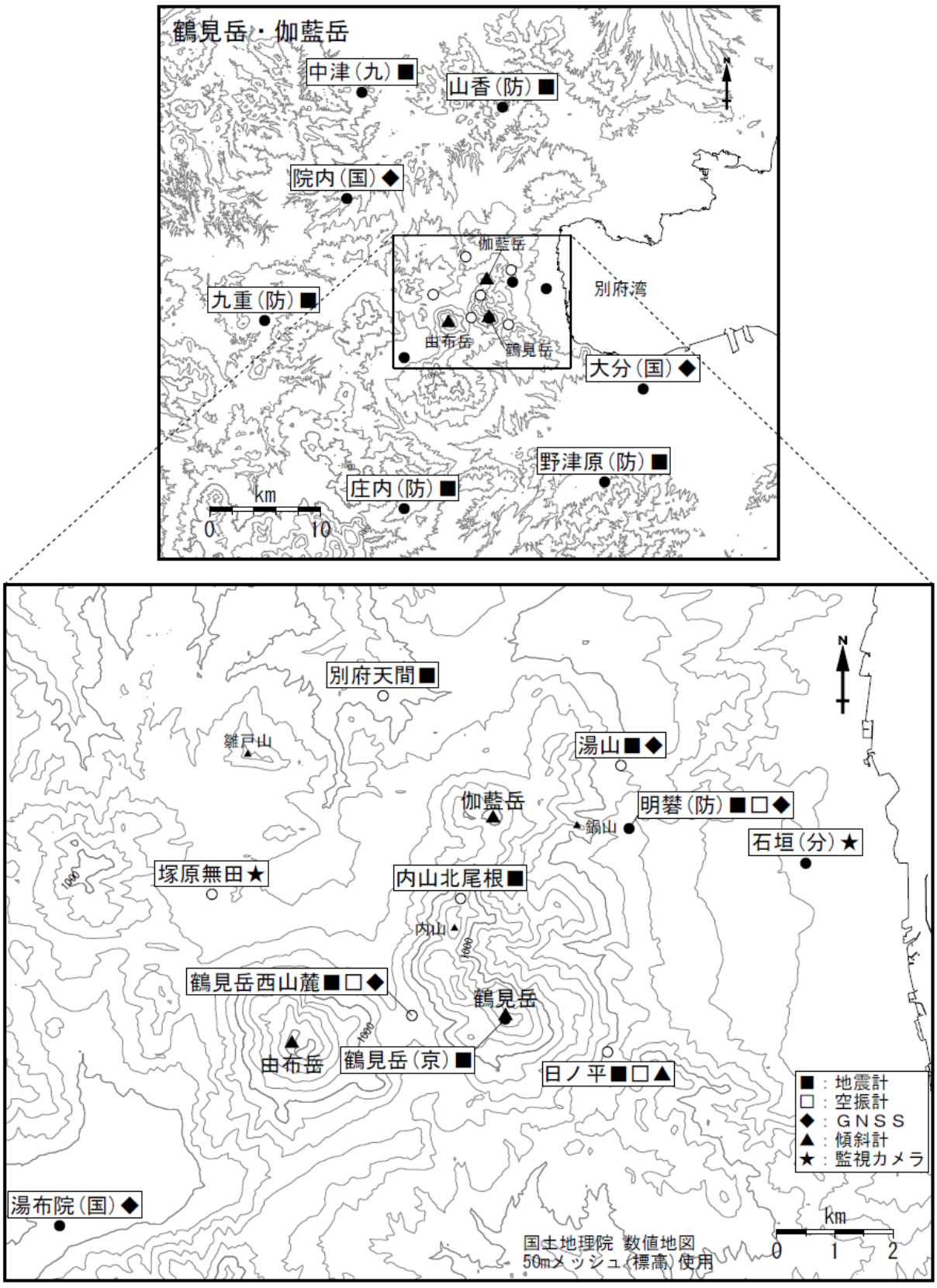


図６　鶴見岳・伽藍岳　観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（京）：京都大学、（九）：九州大学、（防）：防災科学技術研究所、（分）：大分県